

朝夷巡嶋記

第五編  
卷五

13

704

25





弟の家を譲りて為す故郷と去りしものあり阿容とて迎らば生涯  
 隠れく渠は遺下とてあつたれは誠ありまがひはら葉三郎と名告る人の  
 心の事ともあはれどいかにせうといふもの有りては後これの誤  
 なくともこれを見よの嫂かれと名告らば秋山難の尾上問と妹と依り形  
 かね世の形か身を懸くは隠しむる底は疎くはるを姫人の死を  
 鎌倉の叔母許秘密の使を委のりも縁は繫る見身はあはれが今を  
 感あつたるなり成就せんとてあひのめをひきや禍れり起るは現姫の  
 尤歎に今内はまのゆりも良人の為す故ある弟は自殺せしも  
 勸解はよしもあはれは共死の望も姫人と良人贖か自刃の刑罰吾侪は  
 悲しむ事ひくくはげの氣を失ひて事は後れと見身は命と捨せざる  
 後悔の詮をたれどもは丈夫の死身は孝悌義信の人なりかまを皆薄命  
 あり、過世の終る業報を素より賤に身なりあは幸か死に現常あり  
 心内痛す死に姫入る由も懲艾の素も均解を御先途も見果はてあのが  
 随ち死を命を女子は似げあはれども且くも存命に死情由は聞召れん  
 間中隼人が還り侍らば云々と告せむと恐れぬ世を忍ぶを更さるは御運も  
 聞へし。その終死に侍らば影は立形は添く護りなるともあはれ  
 惜る名残は下方をへば果敢ては丈夫よきの初に諸事死にけ  
 ちる物いさしもの世の誤りあり悲しむるは周詩は公道人情に  
 あはれ花も実もある忠烈節義の妙あり魂を散ら惜た今果て言の  
 葉日ありあはれ雄とて死し一言毎は瘡口より潰る血と吻息とさへ相りて  
 俯沈むは葉三郎は低俯し耳を澄せし頭を擡く感涙坐し目をあはれ通  
 微妙に烈女か今その言のありや兄の艱苦も嫂の節義もあはれ死んといふ

あり、過世の終る業報を素より賤に身なりあは幸か死に現常あり  
 心内痛す死に姫入る由も懲艾の素も均解を御先途も見果はてあのが  
 随ち死を命を女子は似げあはれども且くも存命に死情由は聞召れん  
 間中隼人が還り侍らば云々と告せむと恐れぬ世を忍ぶを更さるは御運も  
 聞へし。その終死に侍らば影は立形は添く護りなるともあはれ  
 惜る名残は下方をへば果敢ては丈夫よきの初に諸事死にけ  
 ちる物いさしもの世の誤りあり悲しむるは周詩は公道人情に  
 あはれ花も実もある忠烈節義の妙あり魂を散ら惜た今果て言の  
 葉日ありあはれ雄とて死し一言毎は瘡口より潰る血と吻息とさへ相りて  
 俯沈むは葉三郎は低俯し耳を澄せし頭を擡く感涙坐し目をあはれ通  
 微妙に烈女か今その言のありや兄の艱苦も嫂の節義もあはれ死んといふ

獄あまくと哀あはれしくと又また憾あはれしくと多おほくうと。これこの年とし来きた心こころとと竭あきらしくと舎しや兄あにのの往ゆ方かたとと素もとのの志こころざしとと遂ついにびとくと今いま自まづ殺ころせとるとのの事ことはは嫁よめ前まへのの自まづ害あやもとととがが疎そ忽とつたると。

怒おこりと事こと起おこりと亦またこれこのとと哀あはれまととと舎しや兄あにもも又また嫁よめ前まへもも或ある二ふた室むろをを或ある途みちはは相あ遇いふともも由よし縁ゆかりをを隠かくしと面おもてとと背そむけとくと心こころつとくと今いまのの日ひもも徒あや過とすと少すくひとのの事ことをを亦また憾あはれとといいふとんとやや糲せ一ひと碗わんのの糧かきとともも或ある終つひはは飢う

渴あみと充みつともも又また一ひと領りやうのの衣えとともも或ある交まじ寒さむ暑あつをを凌あぐともも兄あに弟あに一ひと郷ちやう住ぢゆうひひ

共とも侶りよはは世よをを渡わたらとばとまとのの憑たもと一ひとかか死しにに兄あに弟あにをを引ひおとまとると家いへをを捨すてと

往ゆ方かたととあとつと弟あに兄あにをを慕あこへともも遂ついにはは直ただでで嫁よめのの命いのちをを縮ちぢめと弟あにをを殺ころせと

只是ただ過と世よのの讐あや敵たひがが生なまとると親おや子こととあとりと同どう胞ぱうととあとりと夫おとこ婦めかけととあとりと天てん道だう

人ひととと殺ころせといいふと。これこのをを過と世よのの業ごう報ばうとと觀かんまれとばと恨にくまとると。ととハハ多おほくと遭あひあひあ

別わかれと舎しや兄あにをを慕あこへともも夫おとこのの渡わたりと遠とほ外とほははえとあとりと嫁よめ前まへをを

訪たづねとのの事ことをを今いま思おもひと曉あやれともも六む日にちのの昔むかし蒲かきははりとやや何なにやとせとんと

悔くいとめとけとばと校がう校がうはは閉とりと目めをを睜ひらきと現あらわとるとうとみと理りとときとののみとがが伏せのの来きたせと

とと死しんと弟あにがが忠ちゆう孝かうをを守まもると隨まりと潜ひそまとると報はいとふと伏せははりと感かん嘆たんしとくとそとハハ弟あにがが

実ま父ちちをを苗な四し郎らう大だい八はちのの年とし枉か死ししとあとりと痛いたまとると弟あにがが

精せい悍たんしと仇あだのの軀かみをを刺さしと死しとと美うらとむと死しをを孝かう烈れつとといいふと継ついで父ちちのの枉か死しととあとりと

復たが讐あやのの口くちをを殺ころすと爲なすと親おやとと殺ころすと怨うらをを復たがすとももゆと遂ついにはは妻つまのの家いへのの女め

ありともも竟ついにはは薪かき水みづ足たりらとばとくと人ひとのの奴やつ婢めかけ傭あか婦めかけははあとりと殺ころされともも暮く暮く二ふた郎らう及およばと

かくとそのの心こころをを遠とほくとあとりとあとりとのの心こころをを凍これとあとりとあとりと只ただ管くだ勸すすめとると舊ふる里さとへへ相あ伴ともんととと

といいふとれともも弟あにのの功いさをとと竊ひそむと恥はぢとあとりと且かつ義ぎをを死しにに憑たもとてとあとりと悪わるくと

死しんと弟あにががうとへへ心こころをを渠みちわとかとあとりとせとあとりといいふとれとハハ只ただ舎しや弟あにををあとりと城しろ心こころをを殺ころすと

まととと弟あにがが死しんとをを告つげとると斯かくとあとりと評ひやうはは送くわいのの問もん答たふ良よ人ひとははあとりとあとりと弟あに未ま期きのの二ふた句く

ありふりなりいりも是をかり三途の瀬踏をへんといひて刃を抜んとはば  
 藁二郎を激してやの候も疾は浅く交所を外れしうりあふかかぬ  
 までも齊治しく主君は仕人良人を資く後の栄は遇あふとていへども果は頭を  
 うち掉りてあもぬぬうのうりまふり甲斐死女子かるとも死かと思えりを時人  
 絶死とて氣を張りて且もそのいひハ兄弟の感ひを解んぬハ主とあふ  
 され魂は鎌倉より赴き殿は彼玄計を告訴歎けたりと去られぬハ姫人の  
 元実の科を釋ぐやハ死はもの甲斐死めんとて將死に藁二郎は左を  
 小膝より突立とれぬもあふれ後ハせどと引抜く刃を取直はぬは  
 駐るべしあふされば左の巻を持てそを喰丁と搔切く刃を捨て握と俯せば  
 校枝も合さる刃の鑿は生血を流しと抜採る刃直は咽喉を刺刺れぬ  
 枕の傍より居の時子出居の腰障子と外面より颯と響く死に心地内に入る  
 あり便是別人の床間中集人守直と引提る張燈と推抗と兩個の死骸を  
 左見右見と嗟嘆しつ遠く張燈と承塵の釘引掛く阿飛れて俯せ  
 且見姫の薄の索とを解捨くさあは勅りつ事の趣を告ぐれば  
 且見姫ハ稍涙を飲めく大約とめられ首尾藁二郎が鎌倉より来り  
 條はさく光仲の歌及軒のうり藁二郎が誤りて彼下包と時政の身へ質違  
 り且その忠直校枝が節義或ハ自殺と禁人なる身と柱に繫死ぬわつる  
 或みづる非と責く俱は命を預けし校枝藁二郎が衛守の心持今般小  
 いひしりも涙とて報えハ守直ハ泣く夕毎に且驚れ且感しつあふ  
 息と吻と泣く某が来り比ふの兩人ハ自害しく救えくもあふ  
 といふとあふ引提り燈燭と遠離く霎時彼処に立在程は校枝  
 藁二郎が嫂ありしうりあふれりかき今又姫人のと死示せぬあふり

この苗の起る所彼が忠義死の趣曲は知り驚くもの歎くもの詮  
 なく惜めども返るべきありども姫人恙よりあまの幸死中の幸ひ此度  
 鎌倉へ密使の某ハ初より占居りあねども姫人の見歎死を慰まらむ  
 よんがもたは蒙二郎校枝が頻りにあうし勸ゆるがれも篤義のあも死が  
 愆をいふもあらず彼龍潭は臨終は明珠と探りて又虎穴へ入るが  
 虎子を獲るとあんとあひよるが意を任し漫事を行はせ某  
 亦予慮の一失後悔あま立ちかり寔はこの義男節婦ハ身賤いれども  
 その志貴く事々愆とよぶもの主と救ふ足まり當今切死真成人ふ  
 栗まゝその死と急死ハ天をいへ命をいへ惜むく憐れく賞給く  
 悼是一姫人此度の窮厄ハ原是内々のあれが釋あはひのあらんやその  
 歎死沈むるを命と事難義ハこれのあやむ又一條の厄難あり某御向  
 鄰郷多莊官瀬越小権太招れくこの宿所へ赴死は鎌倉より市別當代と  
 稲毛太郎重平の功曹橋間吉六と名告れぬ許多の火共をなく下向ハ瀬越が  
 宿所は跋きどり則某は對面してあや駿河前司廣綱のより曩は陣中より  
 逐電く公命と幾如せしこの科尤輕くは繼この増賀賀光仲ありと  
 ありともこれ亦光仲を蒙りて和田左衛門尉は領けられしが廣綱の  
 莊園ハ官府へ納めらるべ死のあふ今はその義とまうしおぬの家隸ホガ  
 横領の又光仲の内室且見姫ハ太田の莊院はありと受けり夫光仲の  
 子就く問せぬと首もあらんかまはるの家隸ホ太田の莊の券書と  
 捧げ且見姫より共よる鎌倉へあたまめこの残内ハ沙汰と  
 して執権の密意あり稲毛殿下知せられ飛台命や伏とも執権の  
 密意と稟て斯稔便の議を示は惑ひとよりく為達とせ推蒐と

擲捕へ後悔をせし虎威を借る胡論の指南ありぬと某これぞうの  
 きく太田の莊に官府より死行れぬのよあり故より廣綱の別業ありて  
 その塔へ廣綱の往方きればいづれも光仲の指揮ありれば台車も後ひき  
 倉へ進めよと致せしをん下知しむをぬる之從光仲罪ありとも何れ女儀小  
 軍中の事ともし向まんぬつぬくありとぬる之と見姫とを告ぐ  
 有無の答をまうし入るし今宵一々候多ととの期を後へも速りうか  
 うと途は情と思惟ふかこ只縮毛が執權へ伎眉し私意ありて  
 沙汰ぬるに鄙語の弱躬崇あり四処へ水も溜れば明日あ  
 り回答とせしむも苦六必推菟来と狼藉及ぶ今宵姫うへ俱  
 彼伊豆の愛玉ある藍玉院へ走らせんと多ども苦六をぬるを  
 大勢をぬる必追之大厦の僵死とほる死一木のむ柱死ありて  
 死にぬるに聊用ふ死あり死にぬる校枝が頭とぬ姫うへ自殺を  
 ぬる偽りこれと苦六は進与が渠実の油断せんと愛玉へ俱と道中  
 後やとるべしと真も密語に且見姫の涙と謀ありと  
 吾侪のゆゑに校枝が自殺せよと惜死は苟且も難を通れと又  
 その首を落させし仇の遺与ん忍び死せしめられぬ縮毛太郎の曹  
 亦も鎌倉引の親と良人のあはれ死に愁死後れ今又か不祥あり  
 刃も伏せ易けれども校枝と蒙三郎が志と否と死に死に縮毛  
 命を辱めしをいふをんともかとも丈夫の疑ひを解くも素より薄  
 命なりをば菅浦の尼公に請おうし尼もあんとみひを家尊の夫人の禁をせ  
 多賀殿は妻せられし過世短死縁ありけん犯さる罪ありぬるも勿心地去りて

命を辱めしをいふをんともかとも丈夫の疑ひを解くも素より薄  
 命なりをば菅浦の尼公に請おうし尼もあんとみひを家尊の夫人の禁をせ  
 多賀殿は妻せられし過世短死縁ありけん犯さる罪ありぬるも勿心地去りて



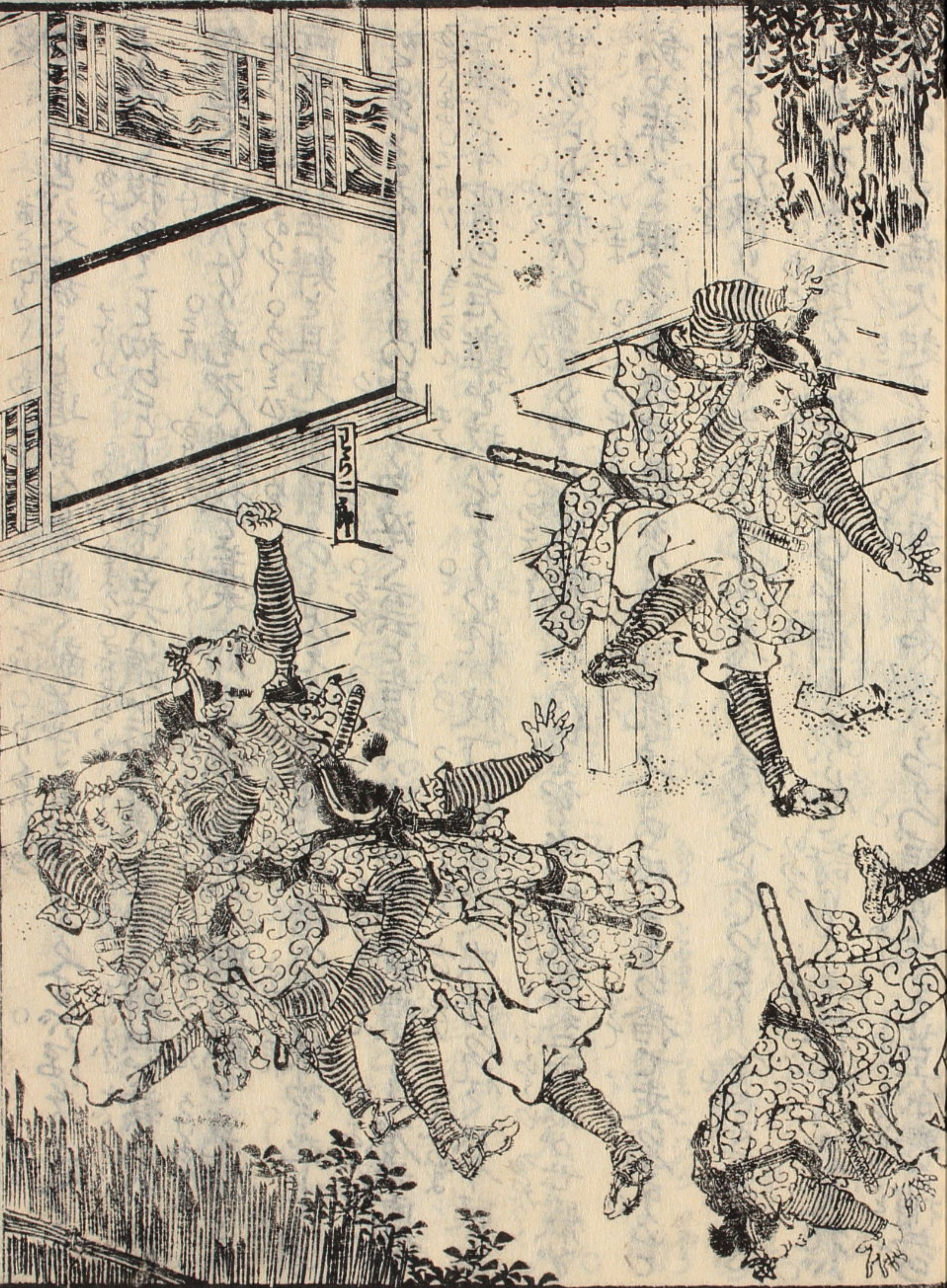


一歌と書つけく光仲より還される二通の尺素と像見の角とを黒髪を伴の  
 服紗は巻菴く遍与之ハ守直これを受たりと賦て懐は文ある校枝が頭髪を  
 剪取えんく死骸のほり人立より折る忽然としく前裁の柴垣のほりより  
 橋間苦六隊兵とぞく真先は頭れぞりこれ怎生か打扮を但見れば皮膚骨  
 品草裏の裏甲して腕は細鍵羅の臂縛透間もくより領ひ足は鐵杖の條  
 煙衣もく紫金装の大腰刀を佩れもく白鐵の十手を頭短は握合て両歩進  
 近づれをれ守直嚮は汝が陳せ趣も期と延しく活路を求めんと精せ  
 ぶれれを迹と跟てまづこの前裁の樹蔭あり事の為体を且窺へばこの  
 程や人を殺して刺すの頭髪もく上と欺んと欲はるを大祀不赦の罪人かれ  
 主従俱よりゆる索と被れと噂とバ守直駭ぐ氣色もく刀を取て信と疾視  
 推参かり橋間苦六鎌倉殿を傲れてを辞しくあぬ駿河前司の莊院に  
 泥殿躑込且見姫とぞく去らんと猿猴が水澤に臨もく月と影不  
 似う且汝が逼迫ハ執権の密意と称はる主の稻毛が私浅か不縦辞と卑  
 しく轎子とぞく迎ともは姫人と速与えやとく還れと罵りくもく  
 袴の稜ろく脛高は引揚る勢ハ悍然も一個の敵をとおひ侮る苦六ハ  
 果を頻り怒る物かいつを彼索被けを敦圀孝仁が殿兵け  
 ありをたもあはれは祖伏見と先と争ハ縁頼険と競蒐をめぐしを  
 守直ハ大刀を真額を技撃しと撃靡け巻振落は修煉の大刀風烈しと  
 當るくもわろせん捕もの大勢辟易しと或ハ縁頼と踏外しと仰あ不落  
 わり或ハ巻石は跪死倒れく身方は踏もめりあり粒足もあ慌忙て左  
 印は靡くも免守直ハ且見姫と扶掖先立立向も仰は廣庭へ走り  
 庭門より脱去んとほ程は苦六ハ諸折戸の小々は蔭に立てりキも遣はる

月夜編卷四

廿三





義男節婦  
 妙子且見  
 姫と極入



妙子

義男

節婦

且見

極入

先とほむば又舞と追首人を聞く敵と守直信と見えはほり近くも  
 まりのを投りて初めどし就中莫六の頭と石を撲くと流し鮮血を禁めあへた  
 やるむくと叫びけり是をば校枝と藁二郎が亡魂の頭れく殿の敵と鬼惱る  
 兩個の姿は在鮮と且見姫の目の見えたり思魂義膳の傳稀や死との後  
 かまよまわりのけりめ秋とち泣く云と告め守直頻に感嘆し原泉兩個  
 亡魂が今宵の危難を救ひゆりかれ彼下包と空中吹揚られ只今取ふ  
 由のくも再びぬる目もわん迷憾たこれのむを校枝藁二郎が亡骸と  
 飲め葬るは眼あくる年来住熟あせし社院まこの供よろも捨て走らんゆと  
 朽や死限りかれども今ゆふせんまか秀更とそつとぐとていも  
 りむくか後方子物の音はるを何あわんと訂り主枝齊一は又れが  
 此居のくも猛火起り棟毎まも火はうらうら弱り伏る若六の捕若  
 頭の上は落花のどく降りぬる燐は焼れ煙は噓ぶ衆皆慌憫たてとて  
 そもの中を叫びあへて起んとてハ轉輾び逃んとてハ跌倒倒る周章騰と  
 いぬりた脱るめあなる虫の火虫のこれら焼るごとく狼狽騒だく猛火の  
 中は迷ひ入りて死をもめ千人か九人よ及べりそが中よ若六ハ殿兵終り兩  
 三人と辛く火を避るれども髪と焼れ衣裳を焦してゆく先も見えたりん  
 庭門ありハ火の北の竹垣を推倒してぞ逃去りる主枝遙まをば  
 是も亦彼亡魂が骸を自焼せんて秋承塵を送せ張燈の火を移し家を燻く  
 夥の敵を七けん寔は不思議の義烈に南無阿彌陀佛と念し涙を以向の兵  
 回向願生菩提と合掌の袖に露はれ旅衣住方ハ伊豆の愛玉とこの死魂を送る  
 茶鬼の光より死夜の路を求めく落めあはる果敢あ世たり。

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之四終

朝夷巡嶋記第五編附言

吾翁の藻を燦々たる毎小神速の如く泉の竭る如く筆下は玉を琢出せざる世人も皆よく知るるが如く又この編は初巻より第四の巻まで今茲臯月稿本成り。介后酷暑焼がごとく秋来れども夕風稀この故は避暑の業を廢し四五ヶ月を過に程は年既は季冬に鄰て第五の巻はゆき成らば書肆の時と後とを之彼八犬傳第四編の巻の足きり例もあれが今刺果る四巻を登て願ふ早春敗んとり翁已とをゆきこれと許しと余とをのりと識しむるれも第五の巻も昨既不終りれり年内刷人速は亦これとて鑄出さば西一様五巻をづく。とて考へば第六編の巻の首は置んと今稿本を閱せり。第四の巻の終に至る義邦光仲ホの黜陟ハとの趣を盡しり第五の巻ののちくまで義秀の進退を寫し出さぬハやとなん就中北越山中の奇談越中岩神の

軍書小説類藏板目録

大坂心齋橋通 比久寶寺

河内屋源七郎

楠二代軍物語

平賀

五冊

繪本雪鏡談

春曉齋作

十冊

楠正行戦功圖繪

本橋

十冊

同金花談

春曉齋作

十冊

神功三韓退治圖繪

皇后

五冊

同孝感傳

同前

十冊

同龜山話

同前

十冊

同顯勇録

同前

十冊

同忠孝二見浦

同前

十冊

九州諸將軍記

十二冊

同月宵鄙物語

真顔作

十冊

復讐言見英雄録 初編

七冊

繪本誠忠傳

遠水春燈書作  
前書

十冊

同 二編

東陽主人編述  
南海五源隱士編述

七冊

同 合邦辻

同前

十冊

同 三編

東陽主人編述  
六花亭富雪画

七冊

復讐言見英雄録 第四輯

七冊

同 竹笋草紙

浪花書院子書  
石田玉三画

十冊

南海 玉源主人 編輯  
浪花 一鶴齋歌川芳梅畫

近日發版

同 淺草靈驗記

春曉齋作  
同畫

十冊

同 忠孝美善錄

東陽亭主人編  
春風齋信画

十冊

同 彦山靈驗記

遠水春燈書作  
併画

十冊

祐天一人代記圖會

六冊

同 寫英勇記

同前

十冊

葉死靈解脫物語

二冊

同 金毘羅神靈記

同前

十冊

本輯の松本元治七人の作者修竹と推定する  
別巻見れば李野村の十冊と別巻を合し  
藤村の八冊と合し丹波の別巻を合し藤村の別巻  
を合し五輯を別巻の別巻に合し藤村の別巻を  
合し藤村の別巻を合し藤村の別巻を合し藤村の  
別巻を合し藤村の別巻を合し藤村の別巻を合し

新累解脫物語

出宇馬琴著  
吉錦北齋画

五冊

小栗外傳

小枝齋  
北齋

十冊

昔話寶屋庫

此亭馬琴著  
勝川春亭畫

五冊

繪本忠臣藏

平安松平春次書  
作同画

十冊

同 中編

後編

此書の古語抄は寶屋庫にて各巻の口と書し  
合して右巻の語を明し世に傳へられたり  
作は手編後編は傳教館川子の傳授の書

同 後編

拾遺  
近刻

十冊

朝比奈巡鳴記

白校編至六編  
馬琴著  
吉錦北齋画

十冊

繪本西遊全傳

江湖口本山人譯  
南都大東書局

十冊

同 七編

松亭金水編述  
馬琴著  
吉錦北齋画

五冊

同 二編

馬琴著  
北齋画

十冊

同 八編

同前

五冊

同 三編

馬琴著  
北齋画

十冊

此書の四巻は、七編の時代を知り史外の事  
事を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し  
七編を見れば、松亭主人の編述を合し

同 四編  
同前

同 十冊

新史 秋七種 曲亭主人述作

六冊

石言選 同前 瑞齋北馬画

五冊

月冰奇縁 同前

五冊

金花夕映 梅春里谷画作 北馬

五冊

孝子嫩物語 蘭山作

五冊

繪本夜船譚 東家晚香画

六冊

繪本那智白糸 蘭山著 北馬画

六冊

同 魁草紙 奇書三書作

五冊

同 奈古曾の刺 風和亭画或作 瑞齋北馬画

五冊

同 平泉實記 東家春理齋 志作 伴國画

十二冊

同 自來也説話 東和亭 志武作

十二冊

同 口之碑 梅春里谷画作 梅春里谷画

五冊

風流倭天狗 蘭山編 後編

十冊

紙治 椿生談 東家作 春理齋

五冊

復讐言初瀨物語 栗枝亭 繪著 北明画

七冊

同 安達ヶ原 白馬 志武作

六冊

再開高臺梅 東家春理齋

六冊

繪本白壁草紙 東里中 作 梅春里谷

六冊

見外白字當利 奇書三書

五冊

通俗巫山夢 十返舎九木

五冊

貧福太平記 春理齋 志武 梅春里谷

三冊

閑際筆記 懶齋藤井先生著

三冊

新田足利 外名將の評論 野矢武帝の傳 志武 梅春里谷

三冊

繪本夜船譚 東家晚香画

六冊





